

「手賀沼の魚・貝類の調査」

手賀沼水生生物研究会 鈴木 盛智 さん

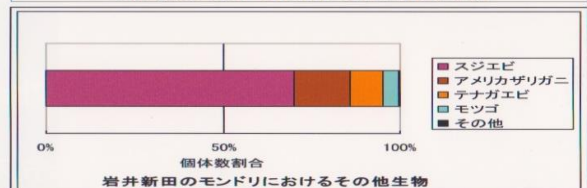
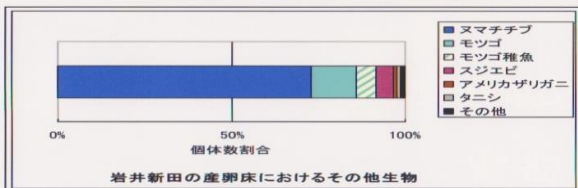
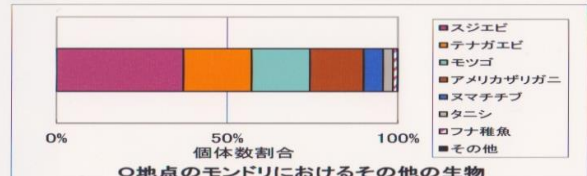
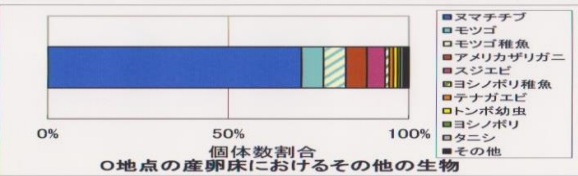
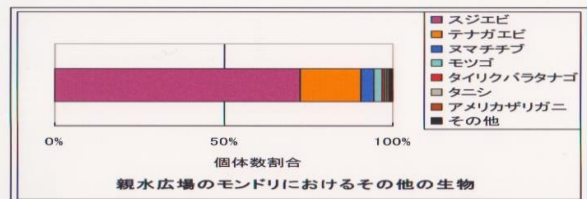
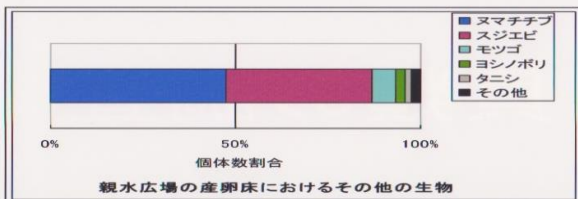
手賀沼水生生物研究会は、我孫子市の手賀沼とその周辺や流域で、調査や親子自然観察会などを行い、水生生物の保全や復元を行い、豊かな手賀沼の実現を目指している。2008年に発足し手賀沼調査を68回実施している。

大津川にかかるヒドリ橋で、特定外来種であるオオクチバスの群れを見たのが活動のきっかけである。オオクチバスが拡大する懸念もあったため、伊豆沼で駆除装置として使われている「人工産卵床」を借りて、大津川近辺に設置した。オオクチバスの産卵は一度だけであったが、手賀沼をもっと知るために、手賀沼の中の調査を継続的にしようということになった。

2008年の第1回調査では、調査をするために（人工産卵床を置くために）、まず舟から下りられるところを知ろうとした。ハスのところは、水深1.4m、ヘドロ1mでとても下りられない。第2回は、大津川河口で調査し、大量のドブガイを発見した。底質は岩盤状になっているところやヘドロ状、砂地等変化が大きかった。対岸の根戸新田も比較的砂地だった。ドブガイの産卵時期には、ヨシノボリにドブガイの幼生が付着しているのが見られる。また、人口産卵床で「マタナゴ」を発見した。人工産卵床とサデ網で獲れる魚種が違うことも解った。



2008年 伊豆沼式人工産卵床とモンドリによる魚類調査 手賀沼水生生物研究会



2008 グラフ作成 矢竹一穂

2009年5月30日の調査では、外来種も在来種も産卵時期で、スジエビが大量発生していた。この時は下手賀沼も調査し、スジエビが多かった。手賀川と下手賀沼の合流点にもドブガイが見つかった。

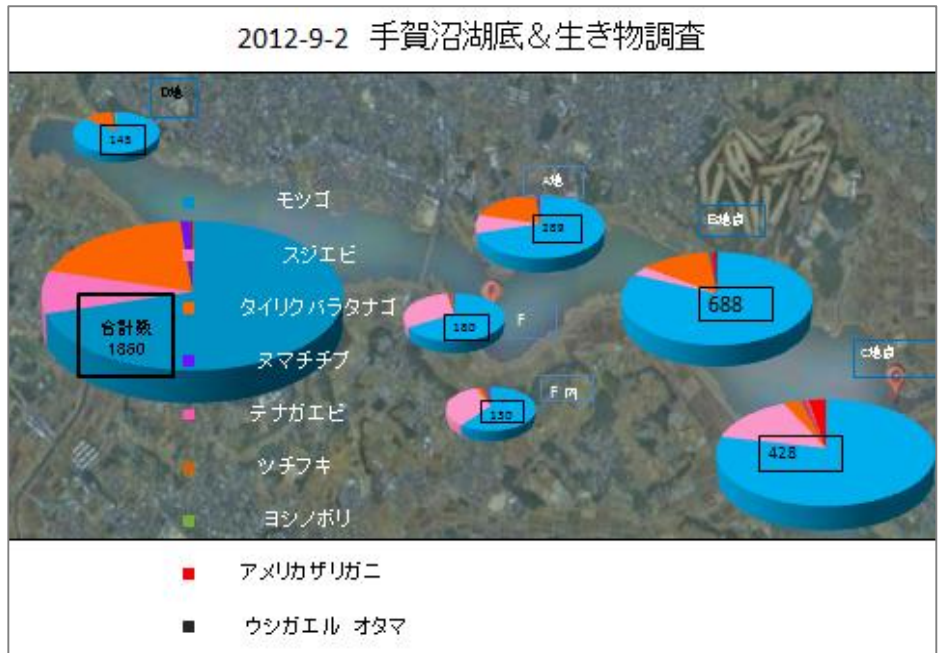
2010年は春先から寒かったため、5月15日の調査では魚はほとんど獲れなかった。特定外来種のカ

ワヒバリガイが出てきているのが解った。この前年に浚渫工事が行われ、貝類が減っているという印象があった。その半月後、沼西側の調査をした時は様々な種が獲れた。しかし、オオタナゴが増えているのが気かりとなった。

2011年12月は、プランクトン調査も実施したが、冬期のため密度は低く、ケイソウ類がほとんどでミジンコも少なかった。

2012年夏場の調査では、ハスが背丈ほどもあり、群落の中へ入るための航路を入り、調査した。

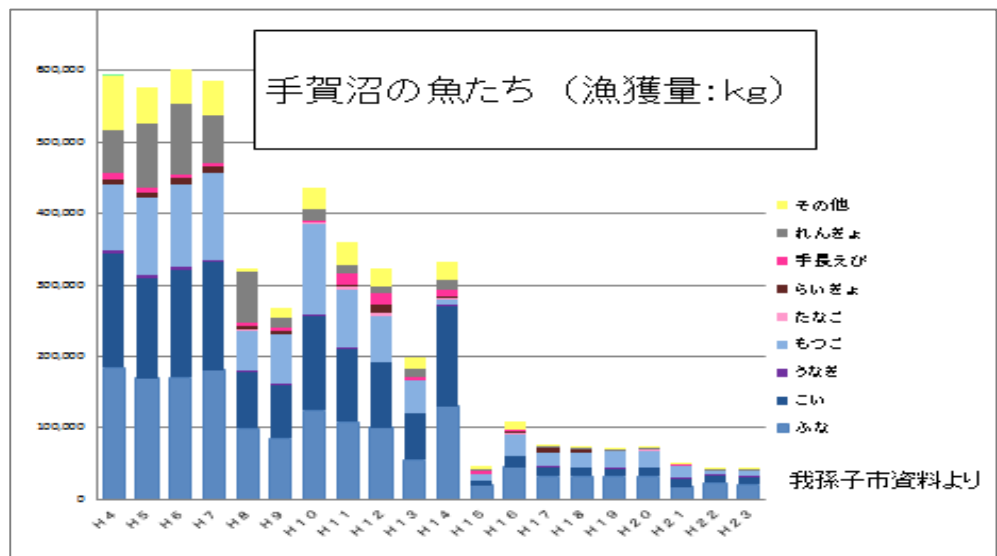
9月の調査では、ビオトープ下が獲れた個体数が最も多く、ハスの中が最も少なかった。ハスの中もモツゴが優占種で、スジエビも



かなり多く、他地点よりもその割合が多い。岩井新田では、生きた貝類が全く見られず、ハスの影響と思われた。また、硝酸濃度が20ppmで他地点の3~4と比べると非常に高かった。



手賀沼漁獲量はどれくらいあるのだろうか。これは漁協のデータで、平成13年で漁獲量が下がっている。北千葉導水事業が始まった時期であることや、漁業者数が減ったことも影響していると思われる。



コメント：千葉県手賀沼親水広場 所長 佐藤 友宣さん

平成18年度から親水広場の指定管理者を行っている。管理運営のなかで最も重要視しているのが体験型の学習会で、その中でも沼岸で魚を獲って調べる学習会を年間50回ほど行っている。

沼岸の学習会で一年を通して最も数が多く採れる魚はモツゴであるが、沼岸の学習会では年間を通して現在6種類程度が採集できる。年によって採集できる魚の種類が変わってきていて、指定管理を開始した平成18年度には、ツチフキ（琵琶湖水系由来の国内外来種）はまれに網に入る珍しい魚だったが、年々増えて、最近では一年中網に入るようになってきた。一昨年には大発生し漁師さんに聞いた話でも、近年漁の網にツチフキが多く入り、商品には適さないためより分けているが、より分けるのが大変な量になってきているということだった。また、天候不順等が原因として考えられるが、この2、3年モツゴは産卵の時期が遅れている。今年も生育が遅れ、夏場でも小さい個体が多かった。

現在の手賀沼ではエビの仲間はスジエビとテナガエビが生息している。平成18年のころは、沼岸ではスジエビが年間通して獲れていたが、テナガエビについては一年を通して獲れる時期と取れない時期の差があった。特に6月の産卵期に大きなオスが岸辺に寄って来て、よく獲れたが、このところ一年中岸辺でテナガエビが獲れるようになった。

タナゴ類は、外来のタイリクバラタナゴが多い。最近では外来のオオタナゴや元々手賀沼周辺には生息しないカネヒラも確認できている。釣りのために放流している人がいるらしいということも、伝え聞いている。タナゴ類が産卵するドブガイは現在もある程度の数の生息を確認できているが、在来のマタナゴやヤリタナゴは生息数が少ない。タナゴと同じく二枚貝に産卵する、汚濁が進んだ時期には姿を消していたビワヒガイ（琵琶湖水系の魚）については、何年かぶりに今年学習会の網に入り、水の館で飼育展示している。

そのほかの外来生物としては、シナヌマエビ（カワリヌマエビ属）と呼ばれる外来のヌマエビがミニ手賀沼で増えている事を最近確認している。手賀沼の沼岸の学習会の際にも、まだ数回ではあるが、採取・確認している。また、特定外来生物のカワヒバリガイも沼岸のコンクリート片などにびっしりついているという状況である。

この10年は水質としてはCOD値に大きな変動がないが、平成18年度から指定管理を行ってきた7年間、沼岸で採集できる魚の傾向は年々変わってきていると感じている。手賀沼親水広場では、今後も千葉県内水面水産研究所のデータに加え、沼岸での実際の状況や、漁師さん等からの聞き取りなども加え、より実地的なデータを公開していきたい。

第14回 手賀沼流域フォーラム 千葉県手賀沼親水広場企画
手賀沼の魚を観察してみよう
開催内容

実施団体：千葉県手賀沼親水広場 【指定管理者：(財)千葉県環境財団】

会場：千葉県手賀沼親水広場
対象：小学生以上
参加者：29名
開催日：平成22年8月20日（金）
時間：10：30～14：00

午前の活動

網長靴で沼に入って網で魚とり
どんな魚が採れたかな？
いっぱい入ったよ

かご裏にエサを入れて沼へ投げ込みます
遊覧船に乗って
桟橋で観察

午後の活動

漁師さんの仕掛けた網にはどんな魚が入ってるのかな？



ヒガイ(手賀沼産)